

「国際連携・高大連携によるICTを用いた外国語教育と
学習者コーパス研究」 国際ワークショップ

「日本を超えた日本語教育
—海外の大学との遠隔授業を通して共通
日本語の可能性を探る—」

本日の内容

1. 科研の紹介
2. 研究の概要について
3. 途中報告
4. 今後の計画

東京外国語大学 名誉教授
小林 幸江
2017/07/16
(於東京外国語大学)

1. 科研の紹介

- 研究題目:「日本を超えた日本語教育－海外の大学との遠隔授業を通して共通日本語の可能性を探る」
- 研究種目:基盤研究C(一般) 課題番号16K02801
- 事業期間:平成28年度～平成30年度
- 研究体制
 - 研究代表:小林幸江(東京外国語大学 名誉教授)
 - 研究分担者:林俊成教授(国際日本学研究院)、望月圭子教授(総合国際学研究院)、平野宏子講師(国際日本学研究院) 以上、東京外国語大学
 - 研究協力者:豊田悦子氏(メルボルン大学アジア研究所 上級講師) 堀越和男氏(淡江大学日本語文学系 副教授) 何美玲氏(福州大学外国語学院日本語科 講師)

2. 研究の概要について 2-1 経緯

・研究チームは以前より、日本語教育における遠隔授業の意義・効果に着目し、海外の大学で日本語を学ぶ学生たちと遠隔による日本語教育を実践し、その成果を発表してきた。

2015.10-2016.3 東京外国語大学国際日本学研究院長

裁量経費 (研究チーム:小林幸江・河路由佳・林俊成・平野宏子)

2015.3.7 遠隔研究会開催 (以降、「前の研究会」)

東京外国語大学(TUFS)・淡江大学・メルボルン大学・福州大学

- ・林俊成 「遠隔による日本語教育の可能性」
- ・河路由佳「米国ポモナ大学とのテレビ会議による日本語での討論会」
- ・小林幸江「多言語多文化背景の日本語学習者間における共通語としての日本語使用の意識調査の試み」

2-2 背景

- 本学の学生の多様性への気づき

日本語母語話者の学生、日本国籍の有無に関わらず外国にルーツのある学生、日系人を含む留学生等、非母語話者の学生...

母語話者  非母語話者

- 共通語としての日本語の可能性への気づき

遠隔授業により学習空間が広がることで、日本語は、日本語母語話者-非母語話者間だけでなく、多言語・多文化背景を持つ学習者間でのコミュニケーションツールとしても用いられる可能性が見えてきた。

◇遠隔により多様な言語文化背景を持つ学生たちのインターアクションを試行：
(日本語教育体験・実践、日本語による討論会、プレゼンテーション等)

◇学生のアンケートから：

非母語話者間：「外国人同士で日本文化について意見を述べ合うのはなかなか面白いです。」

母語話者・非母語話者間：「日本語学習の途中でも深い議論ができることがわかった。」

2-3 テーマについて

- 従来、日本語とは、日本語母語話者が話す言葉で、文化(含価値観)を抱合したものを指し、日本語教育では、それを「正統日本語」(田中 2011)として教えられてきた。
- 本研究では、多言語・多文化背景を持つ人々(非母語話者)の間に、コミュニケーションツールとして用いられる日本語を「共通語としての日本語」(以下、JLF: Japanese as a Lingua Franca)と捉える。

そこでは、

疑問1 どのような日本語で、どのようにコミュニケーションが
図られているのか？

疑問2 日本文化(鳥飼 2011 言語に埋め込まれた「隠れた
文化」)はどれほど意識されている？
どう変容するか？

2-4 目的

本研究は、**JLFの実態を探ることを目指す。**

- ・日本語使用の特徴
- ・JLF遂行に必要な力(コミュニケーション・ストラテジー)
- ・コミュニケーションにおける日本文化に対する意識

それにより、

☞ JLFの可能性を探りたい。

「J」とは何か？

・「〈日本人〉は日本語母語話者であり、母語話者が言語教育・学習の規範であるという考え方がある。この言説は批判的に考察する必要がある。」(久保田 2015)

・「素朴に信じられてきた〈日本語＝日本人〉の単一民族国家観に起因する国語ナショナリズムの再考と解体をこれまで以上に強く迫ってくるはずである。」

(田中 2011)

・Of course, many people still use the term bokokugo, but I definitely sense that Japanese people are coming around to the realization that it is not only the Japanese who speak Japanese.

(Roger, P. 2007)

・本研究では、「言語規範主義によらない、**言語的多様性を支持する日本語、日本語教育**」(久保田 2015)の考え方に立脚して、JLFを考える。

☞ 成果を、「日本を超えた日本語教育」につなげていきたい。

2-5 意義

社会の多様化への対応

・現在、日本の各地で多言語・多文化背景を持つ人々との共存が進んでいる¹。彼らは、日本社会で生活していくために、日本語により相互理解を図り、必要な情報を得ていくことが求められる²。

☞ JLFは、相互理解を重視しており、そこから得られる知見は、人々の円滑なコミュニケーションの遂行、日本語教育の在り方に多くの示唆を与えると考える。

注1 総務省統計局「平成27年 国勢調査 人口等基本集計結果 結果の概要」:「一方、外国人人口は10万4331人 増加(平成22年から6.3%増,年平均1.24%増加が続いている。)」

注2 「国立国語研究所による全国調査では、定住外国人が〈自分が分かる外国語〉として挙げたものは〈日本語〉が62,6%に対して、〈英語〉は44,0%」
(久保田 2015)

2-6 JLFについて(1)

- 「やさしい日本語」(庵 2013)

東日本大震災を契機に、地域の共通言語としてという考え方がある。これは、情報提供の現実的な手段として開発されたもので、現在、地域の共通語として、また、インバウンドの一環としても注目を集めている。「定住外国人が一番理解できる言語は日本語」であるという現実を踏まえ、**母語話者が彼らの日本語のレベル(文法・語彙)に近づけてコミュニケーションを図ろう**というもの。

- JLF

非母語話者間で、「越境コミュニケーション」³のツールとして用いられる共通の日本語をさし、「相互の理解の可能性」に注目したアプローチ。

(久保田 2015)

注3 「越境コミュニケーション」とは、「多様な民族・人種・言語・社会経済間の差異を越えて、積極的に、批判的に、内省的に行われるコミュニケーション活動

(久保田 2015)

2-6 JLFについて(2) ELF (English as a Lingua Franca) 研究から

- ・ELFとは、「非ネイティブスピーカー同士のコミュニケーションはどのようにすれば達成できるのか、その**理解の可能性に大きく注目したアプローチ**」(久保田 2015)
- ・久保田は、「越境コミュニケーション」として、現在、議論の中心が英語のみに集中しており、**英語以外の言語が果たす役割に注目が集まることは少ない**こと、また、国際語としての英語教育は、唯一の規範として英語のみ注目するのではなく、**英語を超えて**、越境コミュニケーションに必要な意識・態度・技能をどのように育むのかを模索しなければならないと指摘している。
- ・Jenkins(2009)(久保田より引用)は、ELFの分析では、従来の教育で強調されてきた音韻・語彙・文法的な中には、当事者の**相互理解に影響を与えないもの**が判明しており、従来の母語話者による規範や正確さは無関係としている。
- ・鳥飼(2011)は、ELFでは**わかりやすさ(intelligibility)**が重要で、それは母語話者の規範からは離れるという新たな視点が必要としている。
- ・Seidlhofer, B.(2004)は、ELFで特に重要な力として、**コミュニケーションストラテジーと調整能力**を挙げている。

2-7 データについて

• 方法

A(母語話者間)、B(母語話者-非母語話者間)、C(非母語話者間)のそれぞれの形態で、遠隔による日本語討論会/意見交換会を行う。Cにおける日本語使用等を、A、Bの場合と比べることにより、JLFの実態を見る。

• なぜ遠隔か

日本に長く滞在している人の場合、母語話者の影響を受けることから、JLFの客観的なデータを得るのが難しいため。

▪ データ

- ①A～Cの形態で実施した日本語討論会/意見交換会の録音(録画)データを文字化しデータとして使用。②意識調査アンケート
- 事前に同じテーマの映像を視聴・準備し、討論、意見交換を行う。
- 第1弾として、社会問題についてのCとAの日本語討論会を実施した。今後、同じ方法でBの日本語討論会を開催予定。第2弾として、社会問題を含むアニメをめぐる、A～Cの形態で意見交換会の開催を予定。

◇ 日本語討論会の様子

- 話題:「そのドリンクには砂糖がたくさん 肥満対策に砂糖税? 税?」(BBC News)

<https://www.youtube.com/watch?v=28rjehQmlcl>

事前に番組を見て準備し、当日は賛成、反対に分かれディスカッションを行う。

- C(非母語話者間)の形態による日本語討論会(2017/3/21)
TUFSー淡江大学ーメルボルン大学(各2名)(スカイプ)
学部生計6名:中国人3、中国系1、韓国系1、(英国人1:院生)
N2以上
- A(母語話者間)による討論会
(本学学部生計8名)
- B(母語話者-非母語話者間)予定



TUFSのグローバルジャパンオフィス(GJO)を結ぶ
日本語学習者の討論会 2017

東京外国語大学(TUFS)の交流協定校で日本語を学んでいる学生たちがスカイプを通して日本語で白熱した討論を行います。この討論会は、TUFSの交流協定校に設置されているGJOを結び、学生交流及び遠隔教育の促進を図ること、また、共通日本語の実態を探るために行われるものです。今回は淡江大学に設置されているGJO、メルボルン大学(2017年度にGJO設置予定)を結んで実施します。見学は自由です。皆さんもぜひ見に来てください。



概 要

- ・日時: 3月21日(火) 日本時間12:15~13:45
- ・参加大学: TUFS、淡江大学(台湾)、メルボルン大学(オーストラリア)
各大学から2名参加します。TUFSからは留学生(英国・中国)が参加します。
- ・テーマ: 「そのドリンクには砂糖がたくさん 肥満対策に砂糖税？」
BBC NEWSをもとに討論します。
- ・会場: TUFS講義棟205教室

主催: 科研「日本を超えた日本語教育－海外の大学との遠隔授業を通して
共通日本語の可能性を探る」基盤研究C(一般)(課題番号
16K02801)

共催 淡江大学 遠距国際聯合外語共學研究中心、メルボルン大学アア
研究所

研究チーム: 小林幸江(代表)、林俊成、望月圭子、平野宏子

◇ Cの参加学生の声(アンケートから)(2017)

〈日本語で討論するということについて〉

- 大半は自己の考えを単に説明するだけの、どちらかという、重みのないものだと思っていた。ゆっくり話すことができ、皆の異なった意見も聞くことができた。大変すばらしい経験だった。
- 他の参加者はしっかり準備したためなのか、積極的に自分の意見を述べたり反論したりしたので、意外と活発な議論ができてよかった。

〈方法について〉

- 日本語の力の差で議論が少し偏ってしまったのは残念だった。
- 日本にかかわるテーマであれば、より熱心に話し合えたのではないか。映画、アイドル、アニメ、漫画、ドラマなどは多くの学習者になじみのあるテーマだろう。
- Technical problems.

小林コメント:途中、回線が途切れることがあった。

3. 途中報告(1)

日本語討論会のデータから、A(母語話者)と比べて
見えてきたC(非母語話者)の日本語使用等

3-1 言語的な面

1) 日本語使用の特徴

・**話の切り出し**: Cでは、相手の話を指示代名詞で受け、**立場を表明する言い方**(私もそう思います)(そうね、それに賛成します)、**自論を話し出す**(研究によると, ...)(やっぱりかけない方がいいんじゃないですか)など直接内容に入っていくスタイルが多く見られた。

2) 相互理解に影響を与えない? 間違い

・**文法的な誤用**: Cでは、終助詞(大丈夫ですからね)、語彙(人間の量)、コロケーション(効果が効く)、格助詞(砂糖に入った)、活用(使えられる)、自他動詞(税金をかかると)、テンス(高校生の時、いつも見ますけど...)、文末表現(～に税金をかかるとつもりです)、接続詞(習慣化した「では」)、母語の影響?(飲料たち、甘い飲み物)、...

3. 途中報告(2)

2) 相互理解に影響を与えない？間違い (続き)

ふつう体/「です・ます体」の混同(すごく負担がかけられますなあと思ひまして)
話し言葉、書きことばの混在は:A、Cで見られた。

C(消費者も好意的に、みたいな、買ってくれ、みたいな、ちょっと、政府がそこまでやるのですか。あの、どのぐらい、消費者は、あの、いじめないでください、みたいな、あの、私達には自由があるべきだと思います)

日本語レベルによるものか？ 影響の有無の実態はどうか？

👉 次回、同じ方法でB⁴(母語話者-非母語話者間)の討論会を行い、違いがあるのか比べてみる。

注4 前の研究:Cの形態:本学の留学生と福州大学の日本語学習者との日本語による意見交換会(中上級レベル)・アンケート(2015) 本学留学生の声
「非母語話者なら言い間違っても何となく理解できる」「非母語話者と話す時は、相手の言いたいことがわかりにくい」

3. 途中報告(3)

3-2 言語以外の面

・コミュニケーション・ストラテジーの活用

※事前に準備していたため、討論が円滑に進んだ。

相手の意見を理解するために: Cでは、相手の発話に意味不明な個所があっても話が進んでいったが、このことから、**話の筋を追い、要点を聞きとる力の重要性が示唆される。**

相手に理解してもらうために: 発言の際には、ゆっくり、はっきり述べる、自分でモニターしながら意見を述べる、英単語の使用が観察された。

・その他:

討論会の間、互いに尊重しつつ、互いの意見をよく聞いていた。モニターが小さいため、うなずきなどは観察できなかった。

3. 途中報告(4)

3-3 日本文化に対する意識

- ・Aでは、婉曲的な言い方多用(～と思います、～ではないでしょうか) Cでは、直接的な言い方(決めてもらえますか)、断定的な言い方(大丈夫ですから)が多く見られた。
- ・Cで、本学の留学生で日本滞在が長く日本語能力の高い学生は(教えていただければと思います)など日本的な表現が自然に用いられていた。
- ・Aでは、日本の討論会の型に従い、話が進められていったが、Cでは実質的に話が進められていった。

(本研究は、討論会の日本語を対象とはしていません)

Cで日本文化の意識が薄まっているのか？

日本語のレベルによるものか？

4. 今後の計画(1)

1 さらにデータ収集を図る。

- ・第1弾: 社会問題を取り上げたニュースをめぐり、CとAの日本語討論会をした。今後、同じ内容で、Bの日本語討論会を開催予定。
- ・第2弾: 社会問題をテーマとしたアニメをめぐり、A~Cの形態で意見交換会の開催を予定。

⇒文字化データ・意識調査アンケート

2 データの質的分析を行う。

1) Cで、情報収集、相互理解のためには、どのような基本的な日本語力⁵が必要なのか。

- ・「**わかりやすさ(intelligibility)**が重要」(鳥飼 2011)

2) Cでは、どのようなコミュニケーション・ストラテジーの活用が見られるか。

- ・ELFで特に重要な力:「**コミュニケーション・ストラテジーと調整能力である**」

(Seidlhofer, B.(2004))

例: 意味を尋ねる、繰り返してもらおう、言い換える、相手が言い終るまで待つ、賛成や反対を示す、発話の順番を伺う、間を置くなど

(Mckay & Bokhorst-heng 2009) (久保田より引用) 下線は本研究(含む前の研究)で確認

注5 前の研究・Bの形態:「米国ポモナ大学とのテレビ会議による日本語での討論会」のアンケート(2016)ポモナ大の日本語学習者の声:「日本語能力の不足から十分に参加できなかった(質問がわからない、話すタイミングが難しい、遠慮してしまった)」

4. 今後の計画(2)

3) コミュニケーションの際、日本文化がどのくらい意識されているか。

- ・Cの参加者の意識調査⁶を行う。

- ・「言語・文化背景により、どのようなJLFになるか、流動的であり、常に変化する。」(豊田 2016)ことから、対象の非母語話者をしぼることも必要か。

協力者(淡江大、福州大、メルボルン大)☞ 中国人学習者

注6 前の研究:本学の留学生と福州大学の日本語学習者との日本語による意見交換会(中上級レベル)・アンケート(2015) 本学留学生の声
日本語母語話者と話す時は、参加者の6割強が日本の習慣・文化を意識すると回答。非母語話者間では5割は意識しないと回答。
「非母語話者同士の方が気楽に話せる。」「緊張しない。」

参考文献

- 田中里奈(2011)「〈日本語＝日本人〉という規範からの逸脱
〈在日コリアン〉教師のアイデンティティと日本語教育における
戦略」『リテラシーズ』9 くろしお出版 1-10
- 鳥飼玖美子(2011)『国際共通語としての英語』
講談社現代新書 129-145
- 久保田竜子(2015)『グローバル社会と言語教』くろしお出版
7-28, 32-53
- Roger, Pulvers (2007) Japan Times Opinion (JUN 17, 2007)
(Wikipediaより: 豪州の作家、翻訳家、劇作家、演出家。東京工業大学名誉教授)
- Seidlhofer, B. (2004) 'Research perspective on teaching English
as an lingua franca'
Review of Applied Linguistics 24 209-239
- 豊田悦子(2017)「日本を超えた日本語学習ー共通語として
の日本語を学ぶ」(2017/3/21 科研内研究会PPT資料)

ご清聴ありがとうございました。



帯広市六花亭中札内美術村
2015/8/6 柏の林